

1. 背景とねらい

近年、高品質な夏野菜生産のために、雨よけハウスが導入され、冬期間の利用
 作目として、根みつばの栽培面積が増大している。しかし、みつばは発芽に日数が
 かかり、乾燥にも弱いので、生育が不揃いとなり、良質の根株が得られずに単収が
 低いのが現状である。

今回根みつばのかん水方法について検討した結果、発芽時のかん水によ、て数わ
 らなしでも発芽が促進されることや、根株養成期間のかん水基準について良好な成
 果が得られたので指導上の参考に供する。

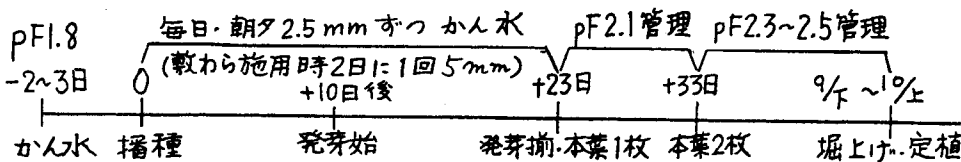
2. 技術内容

1). 根みつばの発芽条件とかん水方法

- (1) 播種2~3日前に圃場容水量PF1.8(深さ10cm. 以下同じ)相当量をかん水す
 る。
- (2) 毎日朝夕2.5mmずつかん水することにより、約10日間で発芽し、数わら施用
 を省略できる。
- (3) 数わら施用の場合は2日に1回、5mmの間断かんがいによる。

2) 根株養成のためのかん水基準

- (1) 初期生育を揃えるため、発芽前後約10日間、PF2.1前後の土壌管理とする。
- (2) すべての株の第2本葉展開期後は、かん水始点をPF2.3~2.5とするかんが
 い方法に切りかえる。ただし1回のかん水量は圃場容水量PF1.8まで下げる
 量とする。



3. 指導上の留意点

- 1) 根みつばのかん水はスプリングラーかん水とする。
- 2) 本葉2枚展開以降ではPF2.5以上になると下葉(第1,第2本葉)の葉先が枯れ上り、
 またPF2.1管理では根株が過湿により半減し株重のバラツキが多くなるので注意する。
- 3) PF1.8(圃場容水量)に下げる水量は畑地かんがいにおけるかん水量早見表
 を参照する(昭和55年度園試参考事項)。
- 4) 根みつばは初期生育が遅れると後の生育に影響するので、播種から第1本葉展
 開まで、かん水管理は細心の注意を要する。
- 5) 数わら無しでのドリップかんがいは、発芽が不揃いとなるので、行わない。
- 6) 砂質で表層の乾きやすい土壌はこの発芽時のかん水基準でも乾燥しやすいと考
 えられるので、数わらをしてかん水する。
- 7) 発芽時の過剰かん水は土面固化し、発芽がこまにげられることがあるので注意
 する。

4. 参考文献・資料

- 1) ミツバと軟化物 岡昌二編著 誠文堂新光社 1974年

- 2) 昭和55年度参考事項 「畑地かんがいにおけるかん水量早見表の利用」
園試 野花三郎
- 3) 昭和56年度参考事項 「畑地かんがいに関する技術・播種・定植から生育初期におけるかん水方法」 東北分場
- 4) 昭和59年度参考事項 「東北地帯における畑地かんがい栽培のための灌水基準と畑地かんがい効果」 東北分場
- 5) 昭和59年度参考事項 「夏地ローマンのかん水効果とかん水方法」 東北分場

5. 試験成績

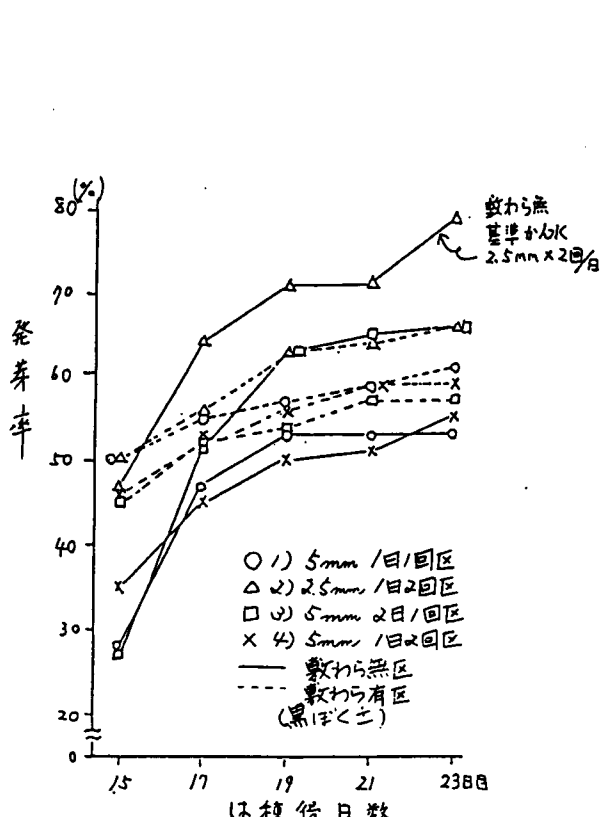


図1 かん水方法と発芽率の推移

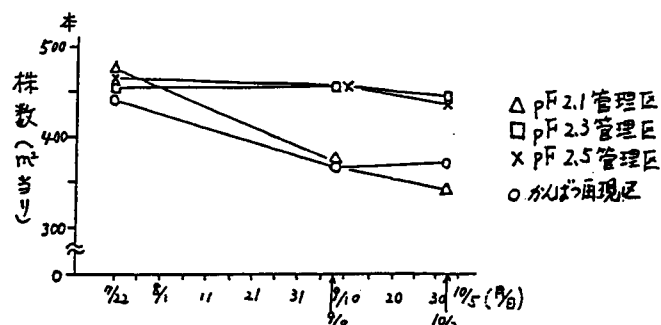


図2 かん水基準と株数の推移

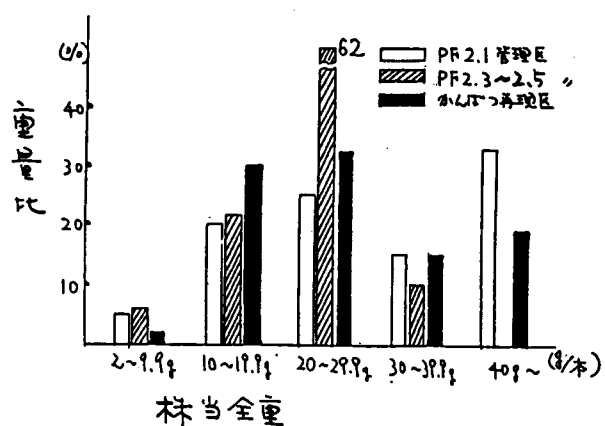


図3 土壌水分管理による株当全重の分布

表1 伏込水時の生育調査 (10月2日)

区名	1株当り						根重 (g)	全重 (g)	根本 の重さ (g)	株数 ㎡当り (本)
	葉数 (枚)	根長 (cm)	根数 (本)	最大根 長(mm)	根重 (g)	全重 (g)				
1) PF2.1 管理区	4.5	20.4	9.2	4.6	4.76	20.0	1.620	6.790	0.52	440
2) PF2.3 "	4.1	21.1	8.9	4.8	2.60	14.6	1.600	6.510	0.40	445
3) PF2.5 "	4.3	25.8	9.8	5.3	2.56	15.8	1.650	6.860	0.36	435
4) かんがい再現区	4.2	24.5	8.4	5.9	5.00	20.7	1.850	7.650	0.59	370